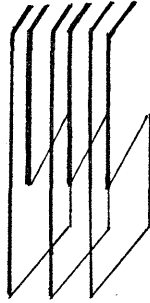


近代短歌に現われた子ども(三)



大塚 雅彦

(6) 新井 洸 あきら

佐佐木信綱の竹柏園からはずぐれた歌人が輩出したが、その中で、比較的世に知られること少なかったけれども、珠玉のような作品をのこした歌人をとりあげよう。新井洸である。彼は明治一六年(一八八三)東京の日本橋に生まれた。本名幸太郎。府立一中を卒え、信綱門に入った。洋画家になろうとして藤島武二の門に入り、美術学校の試験に合格したが、家事の都合で退学。また、小説に志し尾崎紅葉の門に入ったが間もなく紅葉の死にあい、いずれも志を果たさなかった。のち、同じ信綱門の石樽千亦いしくれちまたのひきにより帝国水難救済会に就職し長く勤めた。大正一四年(一九二五)没。四十三

歳であった。「心の花」の編集にたずさわったが、彼の歌風は都会人らしい近代風の清新さに溢れている。歌集

『微明』（大正5）、『新井洗歌集』（昭和6）がある。彼が同門の石樽千亦・川田順・木下利玄・九条武子・柳原白蓮・片山広子等の如く世に知られること少なかったのは、貧しいサラリーマンとして一生を早く終ったこと、性格が陰性で頑固で、内気であり、芸術家気質で、あまり広い社会に出ることを好まなかったらしいこと、作品集の流布範圍が狭かったため広く知られなかったこと等によるものであろう。しかし『新井洗歌集』の序文で川田順が「彼の芸術は名工の彫琢である。しづかさである。渋味である。燻し銀の匂いである」と述べているのは、知己の言といえようか。この人の相聞歌はすばらしく、私はそれを長く愛誦している。「人間のいのちの奥のはづかしさ滲み来るかもよ君に對へば」「おのが身を小さくきたなく價なくおもひ詰むらく戀は退かず」——このようなプラトニック・ラヴ的な、絶妙な恋のしらべを、今までの誰が詠じたるうか……。こうした端正な相

聞歌をつくり、若くして逝いた歌人はまた、次のような子どもをうたった佳作をのこした。

①そむかれむ日の悲ひをうれひつつ百日に足らぬ子を  
いだくなり

②人の子のまして女と生れしをくやむ日あるなめぐし  
きものを

①は『微明』所収。この「子」というのは大正五年三月に生まれた長男光であろう。父の洗は時に三十四才である。子どもは成長すれば、いずれは親の自由にならない親にそむく子、親を離れてゆく子、あるいは親に先立つ子、——それでいて、いやそれだからこそ離れられない親子の縁、まことに親子の絆というものは宿命的なものだ。『きけわだつみのこえ』の中で、或る戦死した学生は次のように書いている——「総ては悲劇でした。しかし芥川も言っているようにへ親子となった時に既に人生の悲劇が始まったのだ」ということは、いみじくも本当だと思えます。気の毒なお父さんお母さんに恵みあれかし。やがては訪れるであろう親子背反や親子離別の宿

命——それを思いながら、生まれて未だ百日もたたない赤ん坊を抱いている若い父親の心境、それをみごとに描いている洗のこの歌は、人間のかなしみの根源をうたっているのではないか。

②は「微明以後」の作品で『新井洗歌集』にある。この歌に詠まれている赤児は大正十三年に生まれた長女の子であろう。洗の逝去の前年で、彼は四十二才であったが、既に身体の違和は萌していたようである。それだけに、ひとしお生れた赤児の将来に対する思いが深かったであろう。拙訳してみよう——「人身逢うこと難し、と仏教でもいつているが、たまたま、その、人の子としての尊いいのちをもって、お前はこの世に生まれてきた。まして、人々から愛される女の子として生まれたのだ。わが子よ、その貴重な女としての生涯を将来後悔するよくなことがあってくれるな。幸せな日を送ってほしい。こうして抱きしめっていると、生ツバが湧くほど、いとしくていとしくてたまらないものを」。これまた、心にしみ通るような作で、私はこの歌を誦していると、涙のにじ

む思いがする。

③今は暮れてひたすら暗き河口におも梶かじと呼べり少年のこゑ

④うなじ白きこの幼きが裾からげお百度踏めり母と祖おば母と

共に歌集『微明』所収。①は「夕潮」という小題のある八首中の一首で、この一連の前に「六月十三日永代橋畔即事」という小題のある歌も並んでいるから、大川（隅田川）辺の夕ぐれの一場面だろう。船に乗って勤勞をしている少年（水上生活者の子どもか？）の「面舵！」と叫んだ鋭いかけ声がきこえてくるような、活き活きした場面である。④は、首筋の白い幼な児（女兒だろう）が、裾をからげて母や祖母と共にお百度を踏んでいる状態で、属目の歌である。「お百度参り」という行事は今はずたれてしまったが、願ひ事が叶うように神社や寺に参り、時には素足で一定の距離を百回往復しておがむもので、女性が愛する人の病氣平癒祈願や、出征した夫や子の無事祈願のためによく行なった古い習俗である。や

はり信綱門の大塚楠緒子（明治八―四三 お茶の水高女の前身たる東京女子師範付属女学校卒、東大・美学教授の大塚保治博士の妻だったが、早世した）の作った「お百度詣」〔太陽〕明治38・1〕は、与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」と共に、一種の厭戦詩として知られる。愛する者のためにこのようなせっぱつまった神仏祈願のかたちを通じてしか行動できなかった昔の女性の悲しみは、重い女性の歴史を語るが、④の歌は、そこに幼児をも点綴して、一層その効果を高めている。

## (7) 木下利玄

もう一人、竹柏園の歌人の作を見よう。木下利玄（本名としはる）である。明治一九年岡山県の足守町に生まれた。先祖は和歌で知られた木下長嘯子である。七才のとき、伯父の子爵木下利恭の養嗣子となった。木下家は旧足守藩主である。学習院を経て、東大国文科卒。学習院時代から志賀直哉・武者小路実篤らと交わり「白樺」

創刊の一員となったことで知られる。歌人としては「心の花」に属すると共に、晩年には大正一三年創刊の超結社誌「日光」にも同人として迎えられた。大正一四年没。歌集に『銀』『紅玉』『一路』、歌文集『李青集』、

『木下利玄全集』上・下等がある。その歌風は「白樺」のヒューマニズム的な匂いや、浪漫性を湛えながら人間くさく、また、その歌調は字余り、口語や俗語の大胆な使用、四四調というユニークな韻律等で、新生面を開いている。

①あすなるの高き梢を風わたるわれは涙の目をしばたたく

②子を失ふ親の悲しみそは遠きことと思ひしを今日われに來し

『銀』所収。「利公の爲めに」という題のある一連中の作。利玄の長男利公は明治四五年八月生まれて生後五日目に死んだ。幼な子を失った歎きをうたり作には、先に述べた伊藤左千夫を始め、後述予定の窪田空穂・石川啄木・島木赤彦・古泉千樞等、いずれもすぐれた悲痛な歌

をのこしているが、まことに短歌の粹は相聞と挽歌にき  
 わまることを証するものであろうか。①の歌の中の「あ  
 すなろ」は翌松あるいは羅漢柏と書き、「あすなろう」  
 「ひば」「あすわ」等の俗称もある、ひのき科の常緑喬木  
 である。「明日はヒノキになろう」の意がこめられてい  
 る（井上靖に「あすなろ物語」の作がある）。葉が松に似  
 てもっと大きく、鱗状に重なり合う。庭のあすなろの高  
 い梢を吹き鳴らして風が過ぎてゆく、それを、生まれて  
 間もない子を死なした作者が、悲しみの涙に溢れた目を  
 しきりにまたたきながら茫然と見つめているのである。  
 本林勝夫教授は「あすなろという名まえが、成長の日も  
 みずに逝った子への感傷をいつそうかきたてているのか  
 も知れない」（前出『現代短歌』）と述べ、日笠祐二氏は  
 「涙の目をしばたたく」の表現について、「やや概念的な  
 用語であるが、しかもその口語の発想を卑俗低調に墮さ  
 しめないだけの、高雅・切実に張りつめた声調を有して  
 いることを、見のがしてはならない」（吉田精一他二氏  
 編『現代短歌評釈』昭41・2）と述べている。ちなみに

利玄は子ども運が悪く、大正三年三月に生まれた次男二  
 郎も翌四年一二月に死亡（この悲しみをうたった作品に  
 『紅玉』所収の「二郎に」という一連がある）、更に、大  
 正六年六月出生の長女夏子も同年一二月死去（これにつ  
 いても同じく『紅玉』所収の「夏子に」の一連がある）  
 している。この三人の子の死は、利玄を深くうちのめし  
 たようである。②は、今まで他人事と思っていた子ども  
 の死という悲劇が今日自分にやって来た、という実感の  
 訴えは、読者の共感をさそう。

③ 街をゆき子供こどもの傍そばを通る時蜜柑みかんの香かせり冬がまた来  
 る

④ 子供こどもゆゑ褒美ほびなくてはと不憫ふびんがり妻つまが見てゐる遠お  
 ろよぎの列

⑤ 遠足うんそくの小学生徒しょうがくせい有頂天うりてんに大手おほてふりふり往来わらいとほる

⑥ 着脹きぶくれて歩あかされるし女の児こばたと倒れその儘泣まま  
 くも

利玄はまた、他人の子どもをしきりにうたっている。  
 利玄全歌集を讀んでみると、子どもを素材にしたものが

すこぶる多いのに気付くのである。③から⑤までは『紅玉』所収、⑥は『一路』所収である。③はいかにも新鮮な歌だ。街頭でふとすれ違った子供から蜜柑の香をかぎとり、それに季節の推移を感じとっているのであり、利玄自ら「自分の歌の出来た境地」という文章（『新家庭』大正11・10月号）の中で「あの青蜜柑の香の鋭く香り高く酸っぱく、新鮮な事はどうだ。此青蜜柑に向って先づ突進するものは、街に遊ぶ子供である」と述べているのが参考になる。この歌の次に「子供みてみかんの香せり駄菓子屋の午後日のあたらぬ店の寒けさ」という一首もある。④は「小学校生徒遠遊」という小題のある連作中の歌。「あんなに一生懸命泳いでいて、疲れるでしょうに。かわいそうに。あの子ども達にごほうびあげたいわね」とでも呟きながら見ている照子夫人と利玄。子ども達への愛情の深かった夫妻の姿。⑤はまた、遠足の小学生達の姿態を実にたくみにとらえている。「有頂天」などという俗語や、「大手ふりふり」という口語調などが不思議な効果を出していて、まさしく余人の真似られぬ

利玄調である。⑥も「ばたんと倒れ」と擬音を入れた平易な童謡調が、子どもの姿を実によく出して、泣きじゃくっている恰好が眼に浮ぶ。利玄短歌のつくり出した真情流露の子ども世界であろう。

## (8) 若山牧水

若山牧水は本名繁、明治一八年（一八八五）に宮崎県東臼杵郡東郷村坪谷に生まれた。上京して尾上柴舟の門に入り、早大英文科卒。大学卒業の年に歌集『海の声』（明治41）を出版。これと第二歌集『独り歌へる』に、更に新作を加えた『別離』（明治43）によって、歌人としての声価を確立した。歌誌『創作』を発行し、生涯それをつづけた。自然主義歌人といわれるが、その浪漫的な青春詠は今もなお人々の琴線を揺り、今日でも最も愛される歌人の一人である。酒と旅を愛して昭和三年（一九二八）その生を終えた。享年四四才。歌集はすこぶる多く一五冊に達する。歌論歌話、隨筆、紀行文も多い。全集

は改造社版と雄鶏社版とがある。その伝記的研究等も近年は著しく進んでいる（桜楓社刊『若山牧水』（藤岡武雄著）挿入の月報「短歌研究」12所載の拙稿「若山牧水研究の展望」参照）。

① 著換すと吾子を裸体に朝床に立たせてしばし撫で讃ふるも

② 児等病めば昼はえ喰はず小夜更けてひそかには喰ふ  
この梨の実を

③ 六歳の兄四歳の妹のならば寝てかたりあふ聞けば癒えて後のこと

④ 学校にも読める声のなつかしさ身にしみとほる山里すきて

⑤ 人過ぐと生徒等はみな走せ寄りて垣よりぞ見る学校の庭の

①は歌集『朝の歌』所収。大正四年作。この「吾子」は大正二年に生まれた長男旅人であろう。「この頃妻は長女みさぎの出産が近かったか、あるいは妻が病気で寝ていた時のことかもしれない。牧水が長男旅人の面倒を

みている歌である」と藤岡武雄日大教授は述べている（藤岡著『若山牧水』昭56・3）。満二才の子どもの寝巻を着がえさせようとして、裸にして朝床に立たせたところ、すっかり大きくなっているので、撫でてほめている微笑ましい光景である。この頃「昼深み庭は光りつ吾子ひとり真裸体にして鶏追ひ遊ぶ」などの歌も作っている。

②③は歌集『くろ土』所収。大正七年作。「児等の病めるに」と題し、「八月初め兄の旅人先づ病み、妹みさぎ子相次で倒れ、九月半ばを過ぐれども癒えず、兩人とも腸をいたためたるなり」の詞書がある。病気は二人とも腸チフスだった。だから②の歌の如く、子ども達は食べられないので、親は知られないように遠慮して（？）こっそりと、夜更けに梨を食べているわけで、ほろにがい味わいとベーススをもつ歌だ。「こほろぎのしとどに鳴ける真夜中に喰ふ梨の実のつゆは垂りつつ」という作が続いている。③は病臥して並んで寝ている幼い兄妹が、病気がなおったあとの話をし合っているいじらしい情景

を描いている。いざいまは飯ぞといへば起き出でてゐならび勇む泣くべかりけり」といふ歌も、一連の中にある。親心をにじませ、子煩惱の牧水をしのぼせる。③について谷馨元早大教授は「主観的な感情句を用いないで、全句をあげて客観的に病児のあわれな様を歌っているところがよい」（谷『現代短歌』昭26・12）と述べている。

④⑤は歌集『山桜の歌』所収。牧水は大正十一年の十月中旬、信州から上州に入り、草津・花敷・沢渡・四万・法師・湯宿・老神・白根等の諸温泉をめぐる歩いたが、その折通過した小雨村という山村の小学校を歌ったものである。「ありとしも思われぬ処に五戸十戸ほどの村ありてそれぞれに学校を設け子供たちに物教えたり」の詞書がある。フト通りかかった山奥の田舎の小学校から郷愁のようなものを誘われたらしいことが④などからよくわかる。⑤などは、ものを珍らしがって、校庭から垣根越しに通行人をのぞき見たりする村童たちの動作が、みごとなまでに描出されている。なおこの一連には「先

生の一途なるさまも涙なれ家十ばかりなる村の学校に」「先生のおたまの禿もたふとけれ此処に死なむと教ふるならむ」等の秀作があり、「此処に死なむと」などは、牧水の深い感慨を吐露したような、たくみな表現だ。森脇一夫博士は「作者の純真な性情を読みとることができ」と述べている（前掲、吉田精一他編『現代短歌評釈』）。私などは、自分の郷里上州の山村が素材になっているだけに、この一連は特に忘れがたく心にのこるのである。

（未完）  
（お茶の水女子大学）

#### 〔筆者紹介〕

大正十年群馬県生れ。東京家庭裁判所調査官として活躍された後、昭和五十五年より、本学児童学科教授として赴任され、青少年問題の講座を担当。『非行をみる』（三省堂）等の著書の他、啄木、茂吉の短歌研究の論考もあり、『昭和万葉集』に歌が収められる歌人でもある。